

あづまやのまやのあまりの雨そゝぎわれ立ぬれぬ、そののとひらかせ、

〔源氏物語蓬^十生^五〕御さきの露を馬のむちしてはらひつゝ、いれたてまつる。あまそゝぎも、なを秋の
まぐれめきてうちそゝげば、みかささぶらふ、

〔枕草子^四〕二月つごもりがた、雨いみじうふりてつれづれなるに、御物いみにこもりて、さすがに
さうづしくこそあれ、物やいひにやらましと、なんの給ふと人々かたれど、よにあらじなどい
らへてあるに、一日まもにくらしてまゐりたれば、よのおとゞに、入せ給ひにけり、○中すびつ
のもとにゐたれば、又そこにあつまりゐて物などいふに、何がしさぶらふといとはなやかにい
ふ、あやしくいつのまになに事のあるぞととはすれば、殿守づかきなり、たゞこゝに人づてなら
で申べき事、なんといへば、さし出てとふに、是頭中將殿のたてまつらせ給ふ、御かへりとくとい
ふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんとおもへど、たゞいまいそぎ見るべきにあら
ねば、いね、今きこえんとて、ふところひきいれていりぬ、猶人の物いふき、などするに、すなは
ちたちかへりて、さらば其ありつる文を給はりてことなんおほせられつる、とくといふに、
あやしくいせの物がたりなるやとて見れば、あをまきうすやうにいときよげにかき給へるを、心
ときめきしつるさまにもあらざりけり、らんじやうの花の時、きんちやうのもと、かきて、末は
いかにくゝとあるを、いかゞはすべからん、御まへのおはしまさば、御らんせさすべきを、これが
するまりがほに、たどくゝしきまんなに書たらんも、見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめ
まどはせば、たゞ其おくに、すびつのきえたる炭のあるして、草のいほりを誰かたづねんと、かき
つけてとらせつれど、返事もいはず、みかねて、つとめていとくつばねにおりたれば、源中將の
こゑして、草のいほりやあるくゝとを、どろくゝしふとへば、などてかき人げなきものは、あらん
玉のうてなもとめ給はましかば、いできこえてましといふ、○下